

昭和 33 年

最近「ALWAYS 三丁目の夕日」という小説を読んだ。これはコミックを元に小説化したものとの事。昭和 33 年の東京のとある下町が舞台でそこに住む人々のエピソードが短編小説となっている。昭和 33 年は私が高校 3 年の時である。この小説に触発されて私の高校 3 年の頃を思い出した。

あの年、世の中は皇太子妃が決まり、ミッチーブームで沸き立っていた。正田美智子さんのファッションや一挙手一投足の報道が席捲していた。翌年 4 月入寮間もない頃寮のテレビで結婚式の模様を見た。

映画では石原裕次郎がスターで、「嵐を呼ぶ男」等の映画を見た。又、学校行事として金沢劇場まで約 30 分歩いて「黒部の太陽」を観賞した。裕次郎と三船敏郎のダブル主演映画だったが、黒部ダム工事現場の映像は圧巻の迫力だった。工業高校の生徒には見せておくべきと学校で判断されたのだろう。

通学は、国鉄の北陸本線松任駅から金沢駅に出て金沢市内電車で寺町まで行っていた。定期券代は両方併せて 500 円だった。当時北陸本線は未だ電化されていなかった。朝の通学時間は汽車が満員で、デッキにぶら下がって行ったことも 2 度ばかり経験した。ぶら下がることは大変な腕力が必要で命懸けのことだと思い知らされた。1 年生の頃から北陸本線電化後に走る予定の ED70 型の電気機関車が金沢駅の近くに展示されていた。履物は「あつば」と言った高下駄だった。この年進学校の二水高校が我が校の近くに移設され、金沢駅から寺町の市電の混み具合が酷くなってきた。

部活は剣道部と絵画同好会に所属したが剣道部では予算獲得で貢献する他には活躍することは出来なかった。絵画同好会では T 君と河北潟などへスケッチにでかけたこと、年賀状版画のコンクール、高文連の発表会、卒業文集の表紙用として 90 cm 角の版画を皆で協力して彫ったことなどが思い出される。

遠出する時は専ら自転車であった。倶利伽羅の F 君の家まで 2 度くらい行った記憶がある。F 君の家の茅葺きの葺替えの日に伺ったこと、倶利伽羅峠の社へ行ったこと、帰りが遅くなり夜の金沢の町を自転車で急いだことなどが思い出される。

休日には、町内の子供会の世話を手伝ったりしたものである。

就職のこと

夏休みの登校日に突然日立に就職したい者は集まれと言われ、T 君と一緒にいこうと誘ってくれたので行くことにした。これから就職試験があると言われ、指導部室へ行き落とし物の下敷きを借りて試験に臨んだ。その後面接があり、電気科では T 君が、機械科では K 君がその場で決定、機械科の M 君と Ka 君が電気科の私と一緒に日立工場まで試験を受けに行くことになった。筆記試験と健康診断があり、健康診断は日立病院へバスで行ったが、砂利道だった。試験後日当 600 円を貰い感激した。その晩先輩の寮を尋ねた。翌日、帰る途中東京へ立寄って行こうと言うことになり上野で山手

線に乗ったが、誰も東京は不案内で降りるところも分からず、山手線を一回りして上野で乗り換えて帰った。夏休み明けに採用が決まり一安心したものである。

春

毎年春には校内マラソンがあった。学校は寺町台地にあり学校を出て南へ約 1.5km、西へ約 1.5km 下り、北へ約 1.5km、野町広小路から寺町へ約 1.5km 上り学校に戻るコースだった。毎年学校から約 1km 位の所に家庭科の生徒が待っていて応援しているのでそこまでは皆頑張るのだが、この年に限って約 3km 過ぎの所にいた。皆始めに飛ばしていたので疲れた頃に待機している女子に出くわすことになった。3 年ともなれば私の名前も知られていたので、家庭科の先生から声をかけられ赤面した。1 年の時には広小路の最後の曲がり角で立ち番の先生が、「これで最後だね」と言うのが聞こえて恥ずかしくなったものだが、この年はどうやらビリではなかった様だった。

夏

夏には甲子園で活躍した王選手ら早稲田実業のチームが、帰途兼六園球場で金沢桜丘高校などと交流試合をすることになるので、我が金沢市立工業高校のグラウンドで練習するため来校した。我が校の女子生徒（我が校には家庭科があった）が騒いでいた。

又、毎年兼六園球場で全国高校相撲大会があった。主催県なので何校も出場して居り、見に行ったものである。

秋

秋には金沢大学から教育実習生（教生）が来た。ある日、電気科全員で授業をサボり、一緒にソフトボールをしようと誘って、グラウンドでソフトボールをしていた。そこへ先生が「何をしている！」と大声で呼び戻しに来られた。後で教生からサボっているのならそう言ってくれとぼやかされた。その教生からアルコールの覚え方として、飲んで「気持ちええのがエチル」、「目がちぶれるのがメチル」だと教えて貰ったのを何故か記憶している。

冬

冬の教室の暖房は石炭ストーブだった。ストーブの煙突はストーブから立ち上がり横へ引かれ、窓の外で立ち上がっている。その窓の外の立ち上がりの所で煙突を外しておくのである。先生が教室へ入って来る頃煙突を外された煙は室内にもうもうと立ちこめる。「どうしたんだ」「さあ」「あ、外れていた」などわざとらしい会話をして居る内に時間が経つのである。工業高校 3 年の 3 学期ともなれば、大半の者は就職も決まりのんきなものだった。

毎年 1 月に金沢城を周回する耐寒継走があり我が母校も出場していた。一人のランナーが一周し、4 人で四周するのである。私は尾山神社前辺りで溶けかかった雪の道をランナーが来るのを待ち大声で応援したことを思い出す。